

J・ホイジンガ著
 兼岩 正夫
 里見元一郎 共訳

中世の秋

会田雄次

昨年だったか、私は史学研究会で中世都市の話をしたことがあるところがそのあとある教授からあれでも歴史かと叱られた。日本の西洋史は歴史じやなくて歴史哲学の筈ですというのがそのときの私の答である。この発表は西洋史の学会でのものではないので、できるだけ注意して固有名詞や当時の用語を省き、概念語に変えた。

こうすることによつて、いわゆる中世都市を当時のヨーロッパの権力や農村などとの関係でとらえ、いわば理想类型的に中世都市をその社会的関連において定着させ、できる限り普遍的な一つの図式を構成して見ようとしたものである。だからこういう詰問がでたのは当然なのだが、私の答はすこし註釈を要する。そしてこの註釈が、ホイジンガのこの書物の批判にかかわつて来るのである。

私は歴史を学ぶようになった最初から、歴史の目的は個々の現象や個性を、その唯一性や特殊性において把握することにありという教えに対して反撥した。それは結論なことだが、そんなことがどうしてできるかである。そういう主張をする人は特に史料実証主義ともいふべき人に多いのだが、そういう人は史料を厳密に批判し、

忠実に読めとしかいわない。史料などかなり整つていた所で歴史的
 事実の何億分の一しか語らないではないか。我々はこの乏しい史料
 的事実から出発して真実へ迫らねばならないのだが、いわゆる実証
 主義の歴史でこの飛躍に、必要な新しい自然科学や社会科学の方法
 を充分応用したものがあつたらうか。語られているのは組替えられ
 た史料それ自体でしかなく事実ではないのではないか。実証主義も
 いい、個性の把握も結構だが、その成果の名で存在しているものは
 およそ真実それ自体とは程遠いものである。哲学者や経済学者や文
 士が、理念や経済法則や適当なフィクションで織りなしたものより、
 実証主義歴史学者のえがいたものの方が真実に近いというようなこ
 とは容易に主張できないと私は思う（もちろん両方が一流の場合の
 ことである）。ニイチェのギリシア思想の把握は史料批判の点では
 無茶苦茶かも知れない。しかしヴィラモヴィツの、その点ではお
 そろしく厳密だが、所詮その凡庸な頭でとらえたものより、もつと
 真実をつかんでいるのかも知れない。ブルクハルトの「イタリア文
 芸復興期の文化」は史料批判がなつてないというのでガイガーが手
 を入れつづけた。余りにも典型化しすぎているという点についてで
 ある。しかしガイガーの手を入れた部分が多くなるにつれ、この名
 著の価値がうすれ、遂にこのガイガーの新研究は大部分が捨てられ
 ブルクハルトの原版が再発行されることになつたのだ。ブルクハル
 トの構想したルネサンスの理想類型は忠実な歴史家たるガイガーの
 苦心の結果の実証による修正にも拘らず、殆んど無傷のまま不死鳥
 のように再生した。認識の進歩は必ずしも知識の進歩をもたらすも
 のではなかつたのだ。

實証主義の教えてもう一つ気に食わない点は、概念を作つたり、シニマを立てたりしてはいけぬと主張することである。できないとはいわせない。彼ら自身である程度はしているのだから。たゞ事実という陰にかくれてやつているに過ぎないのである。この問題はいくら議論しても解決しないだろう。それは理論の問題ではなく歴史家というものの性格の問題である。歴史家というものは、他人の体系に対し、この点は事実と合致しないとつぶやくことだけに、自分の学的情熱をささげようとする人間らしい。決断と責任の回避、主観と思考の欠除、職人主義を売物にするだけが歴史家の仕事なのだろうか。

日本における西洋史の実証主義というより更に更に嫌である。戦後西洋史は格段の飛躍発展を上げたことは事実である。英語の本を一冊か二冊読んで論文を書いてそれで学界に通用した時代はもう過ぎた。しかしそれは今迄の一般的な書物の代りに特殊研究を、本文だけを読んでいたのを註まで細かく読むようになったというだけの進歩でしかない。ことにこの頃流行の社会経済史のものは、日本では余り人目につかない特殊論文を読むか、公刊史料をすこし読んで実証をてらつたもので仮に翻訳して向うの学者に読ましたらと思うと冷汗ものなのが大部分である。もつともそれが正直にそう断つていゝるものはそれで立派なものかも知れない。ただ我慢できないのは他人の方法や結論に依存しながら、しかも実証から遠いことをやりながら、恰も史料探求の結果、そういう創見に達したようにごまかしてある論文が多いことである。読む者にとつては何処までが著者の意見なのか、その論文の価値がどこにあるかわからずじまいで、た

だ註や表の多いのに敬意みたいなものを払うことになる。西洋史などは実際実証史学などといえるものができる筈はないのだ。ヨーロッパのマニエスキリプトを読み且利用できる人が果して日本に存在するだろうか。

實証主義で余程立派な歴史でも満足なものはずくないのに日本での西洋史で実証主義（をきどつたもの）は反感をおこさす程のものであることは当然である。ついでに悪口を云わせてもらうと、東洋史も史料が修史書や著作物だから、その史料の価値は低く（とくに社会経済史の場合）余程高度な研究法がとられねば歴史の真実への近接は困難だと思ふが、殆んどすべての研究の方法が大変素朴なのはどういふ訳だろうか。理論的処理による大観が認められる場合も、科学らしい正統方法論の結果ではなく、独自ではあるが素朴な、そしてペリフェラルな見方による強引な割り切り論である。

それ故日本で西洋史をやるといふことは、この私にとつて、西洋の歴史や人間について、いろいろ構想して見るといふことに尽きる。ただ哲学や経済学とちがうのは、思想や社会や経済・政治などを、その具体的連関のもとに把握しようとする点にある。私が西洋史を歴史哲学だと云つたのはそういう意味である。史料がすくないという点では遠慮して、すぐれた研究が利用できるという点では優越意識を以つて。

ここでとりあげたホイジンガの「中世の秋」は、彼の最高の著作である。そして丁度私が文句をつけている反理論をたてまゑとした叙述である。プロクルステスの寝台になりにかねない歴史事実の理論的処理に真向から反対した書物である。しかし誠に不思議なことに、

それを読んでも反実証主義者の私に何の反感をおこさせない。といふよりそれを読むことによつて私は、ややこしい実証主義者に対してはこれが歴史だ、お前のは歴史でない、史料陳列所だと悪口をいひ得る。理論主義者（日本には歴史の理論らしいものは今の所唯物弁証法しかないように思うのだが）に対しては、お前のは歴史じやなくて、お前のコンプレックスの投影でしかない、本当の歴史とはこういうのだとも云うことができる。

「中世の秋」は十四・五・六世紀におけるネーデルランドやフランスを中心とする地方に展開された生活と精神に関する、生々とした叙述である。個々の部分の孤立した記述の集積ではなく、前章の余韻は後章の中に美しいリフレインの如く鳴りつづけ、次々とくりひろげられて行く人生百般の生活は読者の胸裏に一つの交響樂としてひびきわたつてくる。

ホイジンは、ブルクハルトと同様にむしろ視覚の人である。物事を善悪よりも美醜で見ようとする。だからその叙述は読者に何時も形と色を明確に意識させるような筆致で迫つて来る。人は「ブルクハルトがルネサンスにおいてなしたものを、ホイジンは中世末期においてなした」というが、その通り両者の間には明らかに共通性が多い。とくにこの叙述の絵画的構成がそうである。しかし私がつとくにホイジンを音楽に例えたのはこの両者の非常に大きい差異を明確に感じたからである。

ブルクハルトは歴史を規範として、理念として見ようとする。歴史現象はその時代の理念の表現である。さまざまな条件によつてこの理念は歴史として具体的に顕現したときにいろいろの歪みを受け

ている。歴史家の目は、このゆがみの背後の理念を見つめるものではなくてはならない。もちろんこの理念は一言で表現できるような簡単なものではないが一つの整備された均衡を持つたものである。ブルクハルトにとつてはルネサンスのこのような理念は、或は例えは「世界と人間の発見」であり、「古典の復活」である。各章にはこういう題目が与えられ、そこにえがかれた百千万の種々相はこの理念によつて満され、貫ぬかれている。私たちはそこに人物・思想・芸術の均整ある群像配置を見出すことができる。ブルクハルトが歴史の流れに静止を命じ、しかも立体的な時代を、一つのまとまりを持つ平面において見ようとしたといわれるのはそれ故である。それに對しホイジンはすべてを流れ、波動によつて把握しようとする。すべての現象はその無数の個性相を担つてからみあい無限に動いている。ホイジンはこの波動を、いろいろの側面からながめようとするが、その動きの底にあるものを認めないし、また統一的に把握しようともしない。彼の各章の題目はそれ故「生活の中の思想」であり、「愛の作法・死の幻像・美しい生活への憧憬」である。ホイジンの叙述は、無限の動きを写し出し、その部分々々は無限の連関を以つて他の部分の動きにつらなり、如何なる部分にも完結をもたらさないゴチック建築に酷似する。私がそれを交響樂にたとえたのはその故である。ルネサンスは近代の開始という明瞭な視点を持ち、イタリアは南欧世界の明確さを持つ。ネーデルランドのこの時代は中世末期の混頓が支配する。両書の対照は、対象とする世界の相違からも導き出されたものであろう。

しかし、更に決定的なのは歴史に対する両者の態度の相違である。

それはドイツ観念論哲学の支配に反抗し、南方の明晰さと形式主義に憧れたブルクハルトと、極度に鋭利な流動する焦点を持つ眼で以つて流動する事象をそのままとらえ、論断することによつて何物かが脱落することをおそれたホイジンガとの区別である。両者共抽象論が歴史の具体性を損うことをにくみ、体系を排したが、ブルクハルトは現象そのものを見るだけでなく、それに一つの明確な形姿をとらした。ホイジンガは明確な姿をとらしたとき、すくなくともニュアンスが消失することを知り、ニュアンスの喪失を本質の喪失と考えたのである。ブルクハルトの人間像は複雑微妙な個性相にならうがその輪廓と色彩は明らかで、陰影を持たない。ホイジンガのそれは光と影の交錯の中に浮び上つて動いているが、その輪廓は微妙に暗の中にとけこんで定かではない。ブルクハルトのえがいたルネサンスの支配者は権勢と名声と富を、神をおそれずあくまで追求する強い明確な輪廓を持つ個性であるが、ホイジンガの騎士は自我追求の一面と、古い信仰としきたりに感情を束縛される矛盾に満ちたあいまいな存在である。

ホイジンガのこの書物の与える感銘は異常である。あやしいまでの中世的雰囲気をもつて、その文化生活や思想や人間の行動が展開して行くとき、読者は巻をとじるのにながりの抵抗を覚えるであらう。ある人々はこのういつたものを自分も書きたいと感じるだろう。実証主義者は自分の実証というものを明確に知るために、理論家は自分の理論が歴史とどう結びつくかも知るために、歴史家でない人もヨーロッパの精神の本当の母体を知るために、要するに万人が読むべき書物だろう。私はこの書物が面白くないという人がいた

ら、それはこの書物が悪いのではなく、その人が文学や哲学や人文・社会科学を志す資格を持つていないことの証明だとさえ思う。

ここで私は一応問題にしておきたい。そうしないと実証主義をけなして、ホイジンガをほめ上げた私の叙述が誠に奇妙な矛盾なまま終りを告げることにならうから。ホイジンガの生涯とその思想業績については、本訳書に美事な解説がある。西洋史学第二十二輯にも小松原健太郎氏の要領を得た紹介論文があるからそれを参照されたい。ホイジンガはながらくライデン大学の教授であり、ナチスのオランダ進入により、かつて同大学のナチス派学生を弾圧したその自由主義思想と経歴をにらまれて軟禁され一九四五年困窮と孤独の中に死んだ。元來は言語学者であつたが、今世紀の初頭歴史学への大転向を行い、一九二一年遂にこの名著が完成することになつたのである。だからこの書物は歴史学として素人くさいところがある。しかしそれ故に生きた人間性を麻痺させるあの由緒正しいドイツの歴史学の伝統から、史料批判・考証学・註釈学の中毒作用から自由なのである。この他に著作は多いが「エラスムス」研究や論文集「文化史の道」が著名で、すぐれたエッセイストとして「ホモ・ルーデンス」「朝の影のもとに」などを出している。「中世の秋」は子供の時からの中世史への夢想が実を結んだものだ。その骨子となつたのはファン・アイクの絵への心酔とフロアッサールの年代記への興味である。私たちが読んだり見たりすると如何にも理詰めの解釈になる。こういう対象が、彼の手にかかると中世末期の全思想と感情を直接うつつたえるものとして再生するのだ。ここである。眞の歴史家と

史料整理職人との差がわかれるのは、ホイジンガのこの書の基本観をなしているのは、十五・六世紀を中世の秋としてとらえようという大胆な試みである。一切の事象がたそがれの光に染めて語られる。詩歌における人間性の表現も、人の魂をがんじがらめにする信仰と、動きのとれない修辭学の形式と、極度に形式化した思考様式の中で、ほそほそとうたわれているに過ぎないと見られる。強烈な力をもつて固渇した伝統をうち破つて行く人間性の主張の存在はそこに認められていないのである。しかし人は容易にベスト以後のこの時代にたくましい農民層の成長・絶対主義権力の奔騰する生長等々を指摘することができよう。それはホイジンガの合せた焦点より、もうすこし下の社会層——敢えて富裕農民層とはいわない——を見れば容易に認め得る所である。ホイジンガは生長するよりも崩れて行くもの、成形しつつあるものより融解しつつあるもの、荒々しいものより繊細なものに愛着をもつた。この書の全篇は、今正に過ぎさうとするしめやかな微妙に交錯する光につつまれた時代の文化と生活に対する深い静かな愛情につつまれている。この深い愛情こそ、中世に憧れ空想しつつ生きて来たこの学者の半生の生活がここまで深め築き上げたものなのだ。それあるがこそこの書物は単なる史料の

集積ではなく、その史料に再生命を吹きこみ、過去の断片を集積し生きた全体にすることができたのである。

日本の史書においても、対象に対するこれ程深いしかも細やかな愛情と、広く深くしかも身についた学識とを合せ見せた書物があつただらうか。我々はこの翻訳を期に深い反省を持つべきであらう。

更に西洋史を学ぶものの立場からもう一言付け加えておきたい。我々西洋史をやるものが、この研究に匹敵することは遠い将来においてさえ望むこともできないだらう。それを期待することは単なる空想でしかない。しかし、西洋史は、向うの学術を紹介するだけのものでは断じてない。とすればこの書を読んでただ嘆声を発するだけでなく、我々のレーゾン・デートルをもうすこし真剣に考えるべきであらう。私をはじめのべた西洋史の課題についての論及はいささかこの反省を経たうえでの発言である。

最後に大部なそして大変難解な原文を非のうちどころない程立派な日本語に訳され、周到な訳註と解説を付された訳者と採算を度外視して刊行された発行書店に多大の敬意を表する。

(A5 判本文五七七頁索引一二頁 昭和三年九月 創文社発行 定価一、二〇〇円)